

# 富士谷家文書

高橋貞一

(一)

安永八年己亥秋九月十三夜於三本木  
吉文字屋座鋪當座和歌一首

悔多

夕きけなるも川をわたりて  
ふかきかきねの霜におりあつゝ  
秋ふかきかきねの霜におりあつゝ  
あさるしとゞの跡あらはなる

(二)

大園院殿從四位拾遺松隱宗茂大居士碑銘

富士谷家文書

(三)

挿頭抄 諸文

かたし抄

三まき

神宮のかたはら林崎の

神つ宮のかたはら林崎の  
ふむくらにをさめてよとなむ

やうて木のぬみの多なるいけ

やかてこのふみの名をかいつ

けりそ永くくらのちの物

けかゝけて永くくらのちの物

とせむこといとめてたかりき

とせむこといとめてたかりき

時

時に

天明ふたとせにあたりぬるみな月

天明ふたとせにあたりぬるみな月

林崎の書生ら

林崎の書生ら

富士谷ぬしの許に

富士谷ぬしの許に

まをす

(四)

□恐口上書

一 私儀立花左近將監殿用達相勤罷在候處此度 御家來御召抱可被下旨被仰渡候付御請申上度此段

公事出入其外掛り合等御無座候右之段 御聞届被成下候ハ、難有奉存候以上

十月廿一日

天明四年甲辰十二月廿日



中立賣西洞院角西入町

富士谷千右衛門

㊦

代與一

㊦

年老玄託

五人組 藤治

㊦

御奉行様

表書に、

「西御奉行

山崎大隅守様へ帶刀届下書」とある。

(五)

乍恐口上書

一 私義立花左近將監殿用達相勤罷在候處 此度御家來ニ御召抱可被下旨被仰渡候付御請申上度 此段奉伺候尤是迄公事出入其外掛り合等無御座候 右之段御聞届被成下候は、難有奉存候 以上

中立賣西洞院角

富士谷千右衛門

天明四年甲辰十月廿一日

富士谷家文書

年寄

五人組

御奉行様

(六)

口上

中立賣西洞院西へ入町

富士谷千右衛門

右之者前々々拙者用達申付置候處譯茂有之候ニ付 今般家來ニ召抱帶刀差免候間此段使者を以御届申出候 以上

立花左近將監使者

十二月

荒木傳治

(表書)

當宅證文方

加納小十郎へ被成渡候口上書寫也

帶刀御届之御使者荒木傳治殿辰十二月朔日上京翌二日丸毛様へ御使者ニ成御勤相濟候

(七)

覺

一 此度千右衛門殿爲隱居料御頂戴貳百石之内百石分正味貳拾壹石宛文政三年辰年より廻亥年迄貳拾年之間無相違

御渡シ被成候御相對ニ御座候然共万一御上より頂戴之貳百石之内被減候事在之候節者被下高ニ順し其割合ヲ以御渡シ可被成候若其儀に而難相濟事に御座候ハ、其時我等方より貸附置候金子年賦渡シ之内ニ而御都合被成而右貳拾壹石之渡シ方ニ可被成候其時我等一言之申分無御座候爲後日之一札仍而如件

文政三年辰十二月

了頓圖子

廣野 長兵衛

㊤

富士谷 千太郎 殿

高谷 與市 殿

(八)

歸り一札

一 其許身上之義付金高貳百七拾兩之本紙證文ハ取置得共金子之取引ハ 不致候然ル上ハ何歟之取極り被成候上早速 印形差戻し可申候若夫迄にも御遅々 老上不定も有之候而本紙證文を以他より 彼是申出候者御座候者右之譯合故毛頭 古反ニ御座候此一札を以御返答被成候爲其 歸り一札依而如件

文政五年十二月

廣野 長兵衛

㊤

富士谷千右衛門殿 連判衆中

(九)

借用申一札之事

富士谷家文書

一 銀拾八貫七百七拾五匁也

右之銀子此度舊宅家賃濟方之 御世話ニ而借用申所實正也尤右 爲引當此方居宅古券狀壹通指 入置申候返濟之儀者御入用次第御 引合之上ニ而及返濟可申候爲後證 一札仍而如件

文政十年亥八月

富士谷 千太郎 ㊤

舛屋 忠兵衛 殿

(一〇)

一 銀拾貫目也

右之銀子此度舊宅家賃濟方之 御世話ニ而預恩借申所實正也返濟之 儀者何時ニ而茂手廻り次第御返濟可 申候御存知被下候當節之仕合ニ而迪茂 急ニ相辨候義者中々手立も無之御事故 年々割濟ニ成共如何様共致勘辨可申候夫迄之所無利足ニ而預御恩借之所仍而爲後證指入置候一札如件

文政十年亥九月

富士谷 千太郎 ㊤

鍵屋 新兵衛 殿

(十一)

一 札之事

一此度國表御衣服御用之儀御無人ニ付 當寅九月ノ來ル申年迄都合七ヶ年之 間私方へ御預申候所實正也然ル上者

御大切 成御用向之儀ニ候得者御注文之御品々 少も塵抹無之重慮入念御指圖御日限通 無延引相納可申候若右  
御用向一件ニ付自然 不調法之筋等御座候而者顯然貴家様御勤向 ニ相拘リ候儀故此段格別ニ相心得急度大切ニ  
相勤可申候

一 右御用向御德分之儀者御用代銀高ニ應シ 五分通り毎年盆暮兩度無遲滯御渡シ 可申候但右御用高三拾五貫目ノ  
餘ニ相成候ハ、 右餘分之所者前段之步割ニ不拘御德分 御渡可申候且又年限相濟候上者右御用 向御契約通無  
相違返上可仕候爲後證 一札仍而如件

文政十三年寅九月

御用物預主

舛屋 忠兵衛 ㊤

證人

柊屋 久兵衛 ㊤

富士谷千右衛門 様

(十二)

一札

一 銀六貫三百八拾目

元銀拾貫目也  
西十一月ノ末二月迄

ノ百拾六ヶ月分  
五朱半利足扣

内

壹貫三百八拾目引

引殘テ銀五貫目也

富士谷家文書

右之銀子千右衛門の算用可被致所勝手成義を 申立承知不致候得共當暮右千右衛門家實銀 御渡申來未二月皆濟  
いたし貴家并鍵屋 兩家共御證判相祓可申約速ニ付無據譯合ニ付 右五貫目御迷惑筋ニ御引請旁以御規定 □□  
候□右家實濟方之銀子拂方勝手ニ寄 御規定ニ不相成候ニ付來ル未七月同十二月兩度ニ 半分盡御渡し申候様御  
延し被下候様御願 申入候處出入算用無滞相立候は、旁之規定も 相違致候へ共御待可被申由御尤之御儀ニ付書  
面 之銀子五貫目ハ家實濟方之節急度御算用爲相立可申候万一又々勝手申立不相辨候は、 自私急度相立可申候  
彌自私相立候様ニ 相成候ハ、一度ニ返濟難仕候間來ル申年中 五節季ニ割付一ケ年ニ割濟ニ御承知被下候様  
御頼申入候處是又御承知被下置然ル上ハ聊 違變無之候爲後證仍而一札如件

天保五年十二月

小泉 常陸 ㊦

升屋 忠兵衛 殿

猶々本文通り銀高ニ候得共銀方與御對談被下 相成丈ケ勘辨致し被吳様御應對可被下趣ニ 候得共家實濟方之節  
ニ至り不申而ハ御取計難 被下趣委細承知致候何分宜御願申上候萬一 聊も先方致勘辨不被吳々共彼は違變ハ申  
間敷候 仍而奥書如件

(十三)

一札之事

一此度中立賣西洞院角富士谷千右衛門様方御借財濟方之儀 及御掛合候處貴家様々段々御實意ヲ以御對談被成下  
御尤と奉存候私儀も御先代千右衛門様綾小路へ御別宅 以來御世話申上候而委細之談合者一々不及申此度 御渡



し申上候四通之内御直筆ニ御認メ御調印御座候書付 之通り乍不及御世話も申上候事ニ候得共今更不道理 成儀  
一切仕候心底毛頭無御座候ニ付貴家様御挨拶ニ相任 格外之不勝仕候而此度金子五兩ニ而證文并書付 とも都合  
四通御渡し申替濟仕候尤私儀も追々老衰 も仕候ニ付而者猶更之儀御馴染申候御方々不相 替無御腹藏御物語  
申度心底ニ付何事モ此度 打明ケ御物語申上候通りニ御座候間此段千右衛門様へも 御序之砌被仰上御嘶し可被  
下候

御杖先生様御事

一千右衛門様先達而綾小路の御外宅以來之御借財等 右御同人様御直筆ニ而帳面ニ御記し有之候通數多 御座候得  
共夫々私引受埒明ケ致し不殘爲相濟 御座候得共混雜之砌ニ而證文一札等之相殘り候御(事)茂 萬一可有之哉難  
計候得共夫々證狀文御渡し申 上候通御先代千右衛門様千之介様并お梅様等之 御印形之御借財と申いづ方ろ申  
來候共不殘 相濟御座候間左様御承知可被下候其上ニ茂彼是 申出候者も御座候はゞ私早速罷出埒明ケ少茂御難  
儀 御損モ相掛ケ申間敷候乍併御互ニ老少不常者 浮世之有様ニ付死後ニ到り候共彼是出入無之ため 書殘し置  
候一札仍而如件

天保七年丙申正月

大黒屋宗助事

小野田屋

宗助

忤子

嘉助

富士谷家借財濟方御世話ニ付

榊屋 忠兵衛 殿

(十四)

一札

一御先代千右衛門様廣野長兵衛殿の御借受 之貳百七拾兩證文ヲ以彼是申立候得共 右證文ハ金子出入無之則歸り

富士谷家文書

一札有之候ニ 付此度私御頼候而右長兵衛殿方へ及掛合候所 當時大阪表へ下坂被致留守中ニ而以書中 申遣候處筋相分り候ニ付上京次第本紙 乞歸り一札爲取替爲相濟可申段申越候間 左様御承知可被下候右ニ付當人上京次第埒合可仕候爲念一札仍而如件

天保七年丙申正月

大黒屋宗助事

小野田屋

宗助

㊦

悴子

嘉助

㊦

富士谷様借財濟方御世話ニ付

榊屋 忠兵衛 殿

解説

○ 包紙に、「安永八年巳亥九月十三夜於三本木吉文字屋座舗當座和歌二首」とあり、安永八年十月二日成章は沒してゐるので、最も晩年に近い遺詠であらうか。成章自筆。

○ 雪庵撰の立花宗茂の碑銘で、内容は次の如くである。成章の筆寫か。

大園院殿從四位拾遺松隱宗茂大居士

碑銘

雪庵叟撰

筑之後州柳川城主姓源氏立花左近將監諱宗茂本貫産于豐之後幼大友廿五代甲族也矣初 太閤秀吉公并吞四海雖統御日域關西未降其麾下居士時受 秀吉公命在城於筑前立花山春秋十八而乞 秀吉公出馬粵九州逆徒擧軍圍立花城城據峭函固居士常以和勞軍士士亦重義死節者不隔晝夜屍填巨港之岸肥後峰起絃絕薩州豪奪矢竭亡誅之如震稿葉營

墨雖正其干戈不熄者既逮數年兩爺之雄將道雪紹運高士在筑前巖屋山筑後高良山而爲 秀吉公戰死居士天運不虛竟關城門迎 秀吉公之着馬繇是命九州先驅令在筑後柳川城特昇殿而被任四位侍從矣文祿元年壬辰 秀吉公征伐朝鮮日本諸軍對陣居士戰場無當其鋒者朝鮮八道遠斥候大明袒朝鮮而欲拯其弱率援兵百萬騎日本兵革脅厥疆敵不堪負持旋敗績也大明隨勝而屯於朝鮮都雖廣野沙漠人馬盈地寸土無罅隙當此時飲氣吞聲諸將品評而定先鋒於居士居士節下有出群之骨鯁不屑其危文祿二年正月廿六日出朝鮮都南大門外兩雄相爭所謂履虎尾入羿彀時數居士歲廿七禱天恭順也候強敵之變化執魯陽戈拆衝千里外諸軍唱凱歌豈非諸天戮力平鹵獲賊級伏尸者不知其幾千萬吁三國天下如漬瓜時哉草木悲淒居士雄虓走卒知焉雖有 秀吉公數通感牘大統以此時可爲最也事見于家系矣慶長三年秋八月 秀吉公薨騷屑半而諸軍歛刃退陣於日本地矣五年秋嬖臣石田三成叛於 東照大神君而起兵立 秀賴幼君命俾居士攻之居士劈箭居士在本國不知厥來由捷書忽降居士登洛時京極高次守江州路大津城三成僞以諗 秀賴幼君命俾居士攻之居士劈箭甚急也同年九月十三日敵不迨拒即陷其名高當世矣同九月 神君於濃州關原擒凶徒三成天下歸 神君掌握矣大坂殘黨擾亂卻討居士報忠欲購罪於關東居士老母質于大坂居士破若干關鍵不移時日載老母於軍艦速歸本國聽人憫爲之任俠矣後往關東訴事實於 神君神君感爲 秀吉主君有直義而留給奧州南鄉以爲食邑矣 神君元和丙辰夏四月薨 台德院殿大相國於居士恩遇益厚是故仕江戶金城中昕夕勇談昵不去厥坐右者年茲尙矣同六年閏八月給本地柳川城寔希世之重賞也同八年壬戌被任飛彈守矣寬永九年春正月 相國薨 嗣將軍家光公立官情不減相國同十五年九月五日家光公徙御於居士私第是一時之榮盛也同十六四月廿日改舊容難髮自號立齋同十六七月十八日 家光公重到居士私第凡有徒御者兩會列國之諸侯亦以徒御爲家聲居士隨侍而一日不懈矣 家光公頒藜杖勞老賜華巾釐壽功成名遂身退者諸壯士亦可避一頭地也矣同壬午罹微恙而竟不治十一月念五日歸北邙春秋七十六所世嘆惜也矣嗣城忠茂公今歷念七年

而爲居士庶幾垂蓋代勇德於龍華而立石碑於吾山碧玉地仍俾予勒銘記予才陸々而拙記其德雖然從吾祖大滿國師已往大友公爲梁葉之檀素不獲止而綴狂簡銘云

大友嫡孫 勇功達人 有慈有惠 大度寬仁 勞問群士 撫育萬民 叙階四位 陷城大津 肥薩蜂起 一時平均 大明百萬 禦衝八垠 數通感牘 爲希世珍 九州尤物 出類離倫 肆相國命 持操節眞 徒御榮盛 威息邊塵 老蒙藜杖 退拜華巾 屋裡聲價 畜膂力臣 立花氏邵 柳川城鎮 佛閣檀越 龜石萬春  
寛文第八戊申歲仲冬念五日

嗣城前四位侍從立花忠茂公立之

③ 刊本かざし抄の序は、富士谷成章の門人、吉川彦富、山口高端の兩人の連名で、明和四年丁亥仲春の語がある。その頃の出版であらうが、成章の歿時は、安永八年十月二日で、この林崎文庫のかざし抄請文は、天明二年六月である。故に成章の子、御杖に對して贈つたものである。

④ 富士谷家が柳川藩主立花左近將監(鑑壽)家の用達をして居た吳服商(他の文書にて判明)で、天明四年、御杖の時に家來として召抱へられた認知書とも言へよう。⑤はその寫しである。

⑥ 左近將監の使者の口上書で、天明四年十二月、帶刀を許されたことを示す。

⑦ 文政三年十二月、御杖が隱居して、二十年間の生活の費用を取りきめた文書である。

⑧ 富士谷家の商賣を枅屋忠兵衛が代理した文書であるが、何故に吳服商を代理させたか不明である。

ここに紹介する文書も枅屋忠兵衛方に殘留したものである。

この他に富士谷家所藏の畫として覺書がある。

覺

一 宋徽宗帝白鷹

曲尺長 七尺 巾 貳尺六寸表裝共 白鷹大キサ 貳尺六寸斗

蔡攸讚 宣化五年年號在之

土佐光芳折紙 神田道伴極

一 元信 中幅貳幅對

雪中松樹

一 大燈國師かな文

二枚續横物 一文字古金襴 大和大納言ヨリ拜領 大德寺和尚方極

一 兆殿司 中ノ大三幅對

中 釋迦 左右 文殊普賢

一 探幽 大横物 五尺斗

絹地薄彩色 富士

一 同 中の大 三幅對

中 壽老人 左右 松鶴竹鶴

一 元信雅樂介 兩筆中幅 三幅對

中上利劔元信 左右 芦雁 雅樂之介

一 黄樂代々巻物

富士谷家文書

一 安信 貳幅對中ノ大

龍虎

一 秀吉公御文

此外數幅

又家屋敷借増の文書がある。それによると、前及び上端が切られてゐるが、

中立賣通三丁目南側富士谷千君衛門所持之家屋鋪 壹ヶ所 表口拾七間貳尺六寸、裏行貳拾間五尺、土藏四ヶ所、

東者西洞院通、西隣三井惣右門、但利足月

とあり、本文は、

家屋鋪爲質物先達而銀拾八貫目來八月限

□則別紙本證文相渡置申候然ル處右銀□之外此度

□百目借増銀當分借用仕候處實正也來八月廿五日限

□以急度返辨可申候万一日限令遲滯者從

□儀様被仰渡候通右家屋鋪早速賣拂代銀

□申候若家代銀不足仕候敷其外如何様之難治出來仕候共

□連判之者其急度相立可申候爲後日家質借増證文仍如件

天保六年末三月

中立賣通三丁目

借主 富士谷 千右衛門

④

大宮五辻上ル町

證人 枅

屋 忠兵衛

印

大宮通石藥師町

鍵屋 新兵衛

印

なお天保八年九月日付の類似の文書が一通ある。

その他借金の覺書帳簿などもある。最後にあぐべきものに富士谷成章の判鏡がある。次の如くである。

以上、寺田家所藏。

軍奉行



為



寂光紹統

錦成章字仲達  
舖北邊

